

国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業

(報告)

議員名：牛尾 奈緒美

【開催趣旨・目的】

情報社会といわれる現代社会においてメディアが果たす役割はますます重要になっている。そして男女共同参画の視点からみれば、メディアは男女共同参画に資するような役割を担う可能性を持っている。しかしながら、メディアが固定観念やバイアスを再生産し、男女共同参画社会実現の足かせとなっているという現状も否定できない。

本シンポでは、メディアの専門家である研究者、ジャーナリスト、メディア発信者をシンポジストに招き、様々な立場・視点からメディアと男女共同参画の関係についてパネルディスカッション形式で論じる。またワークショップを通じて、一般参加者がメディア分析を体験する機会を提供する予定である。

本シンポを通して、メディアによるジェンダー・バイアス再生産のメカニズムを明らかにするとともに、そのバイアスを取払い、男女共同参画社会を実現するためにメディアがどのような役割を果たすことができるのか考える。

【シンポジウム等の名称・テーマ】

テーマ:メディアと男女共同参画:メディアの可能性を探って

Media and Gender Equality: In Search of Media's Possibility

【日時】 平成 24 年 10 月 12 日 (金) 午後 6 時～9 時

【場所】 明治大学駿河台キャンパスリバティタワー 1 階リバティホール

【参加者数】 98 名

【プログラム】

- 主催 (共催) 内閣府／男女共同参画推進連携会議
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
- 後援 千代田区男女共同参画センターMIW

●プログラム

司会進行：(明治大学情報コミュニケーション学部 ジェンダーセンター副センター長 牛尾奈緒美)

18:00 開会

18:00～18:05 開会の挨拶

…細野 はるみ(明治大学情報コミュニケーション学部 ジェンダーセンターセンター長)

18:05～19:20 第 1 部 基調講演、メディア・ワークショップ

…諸橋 泰樹 (フェリス女学院大学教授)



第2部 パネルディスカッション

19:20~20:35 「メディアを私たちの手にー多様性・創造性・主体性ー」
(Give media a chance: Diversity, creativity, subjectivity)

司会：諸橋 泰樹（フェリス女学院大学教授）

パネリスト：

Joke Hermes（オランダ・インホーランド 応用科学大学教授 (Lector)）

竹信 三恵子（和光大学教授、元朝日新聞記者）

白石 草（特定非営利活動法人Our Planet-TV代表理事）

森 達也（明治大学特任教授、ドキュメンタリー映画監督、テレビ・ドキュメンタリーディレクター、ノンフィクション作家）

Joke Hermes（オランダ・インホーランド 応用科学大学教授 (Lector)、メディア研究者）

20:35~21:00 質疑応答

21:00 閉会

【参加者からの主な意見】

「ジェンダーを語る上でメディアが欠かせない存在であることをよく理解できた」「ジェンダーはメディアによって構築されたといってもよい程に、この二つは密接な関係をもっている」という気づきにつながった。メディアがジェンダー・バイアスの修正よりもむしろ助長している現状に対しては、女性の社会進出や男女共同参画を後押しするのはメディアの力であり、今後は「次世代の社会を担う若い世代のメディアリテラシーにおける教育」や「（ジェンダー視点を持った）メディア従事者を育てる教育が今後大切になってくる」という認識が生まれた。

【シンポジウム等を通して得た成果（効果）】

- ① シンポでは、メディアがジェンダーに関するバイアスやステレオタイプを再生産するという従来から指摘されてきた問題を再確認するとともに、メディアにおける男女共同参画を促進させるためには、受け手の意見にメディアは敏感に「反応する」という部分を利用することの重要性が指摘された。つまり、メディアの受け手である一般市民が、メディアリテラシー、ジェンダーリテラシーを持つことに加え、メディアに直接働きかけること（投書する、意見を伝える等）である。
- ② メディア界で活躍する女性はまだまだ少ない。メディアの男女共同参画を推進するためには、メディア界における女性の進出が今後も進む必要がある。それに加えて、男女を問わずジェンダー視点を持つジャーナリストやメディア業界人を育成していくことが大切である。そのための取り組みが、オランダなどヨーロッパでは既に行われていることがわかった。

【今後の課題】

メディア界で活躍する女性は少ない。政治や一般企業に加えて、メディアの世界で活躍する女性が増えるように働きかける必要がある。

しかしながら女性比率が組織でマイノリティが影響を持つのに必要といわれる「3割」に達するまでにはまだ時間がかかると思われる。従って、女性ジャーナリストや女性メディア人の育成、女性が働きやすい環境の整備に加えて、性別を問わずジャーナリストやメディアの送り手の側にいる人々のジェンダー意識に働きかける取り組みが必要である。

ヨーロッパでは、ジャーナリストがジェンダー視点から報道できるようになるためのハンドブックが作られ、また現役ジャーナリストを対象とする訓練、講座などが開催されていることがわかった。こうした取り組みは性別に関係なく多くのジャーナリストを対象としているという。こうした取り組みを日本でも実施できないか検討する必要がある。

メディアとジェンダーについて考える上で、まずメディアとは何か、メディアにはどのような問題が潜んで居るのかというメディア論的視点は欠かすことができない。しかし本シンポでは、そうしたメディア論が男女共同参画とどう結びついているのかわかりにくかったという意見を持った人が聴衆の中におられた。今後は事前準備の段階で講演者、パネリストを交えた打ち合わせをし、両者のリンクをより鮮明に映し出せるよう配慮する必要がある。

表1 シンポジウムアンケート結果比較

	2011年			2012年
	10/24	10/25	2日間平均	10/12
回収率	56%	59%	58.0%	55.0%
基調講演(とても良い)	11.1%	—	—	28.0%
(良い)	50.0%	—	—	57.0%
計	61.1%	—	—	85.0%
映画上映(とても良い)	—	46.2%	—	—
映画上映(良い)	—	41.0%	—	—
計	—	87.2%	—	—
パネルディスカッション(とても良い)	19.4%	25.6%	22.5%	22.0%
(良い)	33.3%	35.9%	34.6%	50.0%
計	52.7%	61.5%	57.1%	72.0%
シンポジウム全体(とても良い)	13.9%	17.9%	15.9%	22.0%
(良い)	27.8%	25.6%	26.7%	52.0%
計	41.7%	43.5%	42.6%	74.0%

出典：国・地方連携ネットワークを利用した男女共同参画推進事業「シンポジウム「映像メディアの世界における女性の活躍」」運営業務報告書（平成23年11月作成）、41～43頁、46～48頁；国・地方連携ネットワークを利用した男女共同参画推進事業「メディアの役割に関するシンポジウム」運営業務報告書（平成24年11月作成）、29～31頁。

聴衆を対象とするアンケートの結果によれば（表1参照）、前半（基調講演、メディアワークショップ）に「とても良かった」（28%）、「良かった」（57%）と答えた者の割合は併せて85パーセント、後半（パネルディスカッション）では「とても良かった」（22%）、「良かった」（50%）と答えた者の割合は72パーセントであった。金曜夜のイベントであったせいか、前半だけで退席した者が多かったが（後半について未記入の者の割合：11%）、数字だけを見れば前半後半ともにおおむね好評であったといえる。

ちなみに昨年度開催したシンポと内容が異なるが（注：昨年度は映画上映が含まれていた。また二日間の開催であった）、参考までに昨年度のアンケート結果と比べると、基調講演、パネルディスカッションについて「とても良かった」「良かった」と答えた者の割合は、昨年度よりも増加した（基調講演：61.1%→85.0%、パネルディスカッション：57.1%→72.0%、表1参照）。アンケートの回収率については、3パーセントポイントの減少であるが、昨年同様の50パーセント台であった（58%→55%、同上）。今後は、アンケート回収率の向上に向けた取り組みを強化する必要がある。また今後、同様のシンポを開催するにあたっては、質の向上のために、事前準備をより充実したものとする等、努力したい。

以上